

上 桜田アートラボ

～紀要の新時代を考える～

司会

原 すがね × 松田泰典 × 加藤 到 × 鈴木敏彦

Hara Sugane

Matsuda Yasunori

Kato Itaru

Suzuki Toshihiko

偶然から生まれるモノ・新たな試みへのアプローチ

工芸コース／ 素材-ism展をふり返って

松田泰典(以下：松) 今年度は紀要のリニューアルにあたり、制作系の先生方が日々どんな活動研究をされているのか、学内外へグラフィック的に伝えるという新たな企画を立てました。今回クローズアップしました工芸コースの原先生から今年のテーマや展覧会についての話をお聞きしたいのですが。

原すがね(以下：原) 紀要のリニューアルとは別に、展覧会自体は工芸コースの企画として始まりました。普段自分たちがモノ作りに携わり、それぞれ作家として得意とする分野以外の力を引き出せたらというのが展覧会の一歩の狙いでした。そして、生産デザイン・鈴木先生に参加して頂き、モノだけではなく、空間作りから工芸として関わってみようというのが今回のテーマです。紀要に関しては、それぞれの作品を発表するチャンスは頻繁にあります。8人が集まった時にどのような可能性を引き出せるか、また学生に指導をする際、素材を単一ではなく複合的に使うことをコースの教育の特徴としています。教員側がそれを体現したらどんな形になるのか、というような実験的な試みを記録する大きな意味がありました。

鈴木敏彦(以下：鈴) そうですね、もともとは、一人の部屋、二人の部屋、にぎわいの部屋という3つの部屋をテーマにしたいということのを伺い、それでは、全体を一軒の家みたいにできたらと考えました。かつて建築が様々なアートの総体のようなものであったように、あるいは壁には壁画、天井には天井画があったように、建築の部位が工芸の作品で構成される空間が産まれることを期待しました。というのは、現実的にはコストとかいろいろ問題で工芸的な密度の高い空間を作ることは困難です。しかし今回は工芸作家が集まるわけですから、そんな空間も可能ではないか、そんなところから出発しました。

松 展覧会自体はどこで行われましたか？

原 新宿のリビングデザインセンターOZONEです。

松 この展覧会と紀要はどのように関係づけられるのですか？

鈴 一度やったことをきちんとまとめて記録して発表しようということです。そのことと紀要の新たな企画がマッチしたことになります。

原 仮設の展示空間は記録としか残りませんので、撮影はしっかりしておこうということで、建築空間撮影を専門にされているナカサ&パートナーズさんをお願いし、紀要にも使わせていただきました。

鈴 展示した作品は一言で言えば、奥行き2.7m ×間口8.9m ×高さ2.7mという大きなフレームの中に2つの通り庭と3つの部屋がある一軒の家です。たとえばテキスタイルの原先生はそこに天井や屋根のように布を宙に浮かせ、漆の小林先生は壁の一部を作り、そして陶芸の和太先生はあたかもそこに人がいるような焼き物を置かれたというように、全体的には空間が作品で作られているというものです。

松 非常に魅力的な試みのように思われますが、実際にやってみた感想としては？

原 普段のアプローチとは違って、会場は普段工芸を見せるギャラリーではありませんので、その空間に対峙すること自体が大変でした。3つの部屋で担当を決めたのですが、どういう作品を置くか、どういう空間を目指すかなど、準備に一年くらいかかり、長い道のりでした。出来上がった作品は完成度の高いものになったと満足しています。

松 反響はいかがでしたか？

原 そうですね、実際に観て下さった方は、工芸というカテゴリーでこのようなアプローチがあるのか、自分たちの持っていた「工芸」というイメージを、いい形で崩してくれたというコメントをずいぶん伺いました。学生たちの反応も、まずは単純に、自分たちの先生がどんな仕事をしているのかという興味から始まり、工芸の可能性と意外性を見ることができておもしろかったようです。

松 鈴木先生の意図としてはいかがでしたか？

鈴 たとえば、二人の部屋は2畳の茶室のような空間に仕上がったと思います。原先生はテキスタイルで天井と床と間仕切りを担当し、金子先生は水屋とつくばいのオブジェを制作、そして小林先生は漆で壁面の一部をあたかも床の間のように仕立てましたが、今回のように、作品を作る時にその作品が建築の部分になることを前提に出発するという経験はあまりなかったと思います。その意味では、完成イメージは僕だけがわかっていて、出来てみて、はじめて実感できたのではないのでしょうか。それぞれのエネルギーがうまく融合した魅力的な空間が生まれたと思います。

原 最初は鈴木先生の求める空間に一生懸命に合わせよう、どんなことを求めているのだろうと手探りでしたが、途中で「どうぞ好きなことをやって下さい」といわれて、それからやっと解き放たれたように好きなことをやったという感じです。

鈴 結構最初は警戒していましたね(笑)

原 鈴木先生という工芸の専門家でない方が参加されることで、ということが自分たちに求められているのかという発想で始ま



原 すがね

●多摩美術大学染織専攻卒業・同大学院美術研究科デザイン専修修了
3rd International Miniature textile Art Encounter 銀賞(メキシコ)
4th Fiber Art Biennial "Trame d' Autore"招待出品(イタリア・スイス)
3rd. International Biennial-Women In The Textile Art 招待出品(アメリカ・ベネズエラ)
個展/東京電カプラスマイナギャラリー・ワコール銀座アートスペース・巷房・ガレリアグラフィカ bis、その他海外展・個展など多数。日本テキスタイル カウンシル監事
ホームページ
<http://www.ne.jp/asahi/shore/sugane/>

松田泰典

●1955年、小樽市生まれ。民間研究機関で真珠の材質・保存の研究を進めたのち1993年から本学教員。その間、1989～90年には正倉院宝物の材質調査を依頼された。専門は文化財保存科学、美術材料科学。文化財の保存環境、とくに木材からの揮発性有機化合物をテーマとして研究を進めるかたわら、地域文化財の保存・活用を地域とともに考える活動をおこなっている。現在、文化財保存修復学会運営委員、北海道・東北保存科学研究会代表。

加藤 到

●1958年山形県鶴岡市生まれ、東京都立駒場高校時代より8ミリ映画の製作を始め和光大学、イメージフォーラム付属映像研究所等で映像を学ぶ。実験映画、ビデオアート、インスタレーション、パフォーマンス等幅広くメディアアートを手がける。本学開学以来、チュートリアル「ドキ山」の活動を通して学生ボランティアを組織、ドキュメンタリー映画祭の運営に協力している。前回の山形映画祭で上映された自作の短編「KAISEKI料理」(16分)はその後、中国、ドイツ、カナダ、コロンビアなどの国際映画祭でも上映されている。

鈴木敏彦

●建築家・デザイナー／空間の移動可能性および持続可能性をテーマに、「スペース家具・プロダクトな空間」を指向する。このような家具と空間の間のようなオブジェクトを「mobile architecture」と定義し、一連のデザインとして、国内外のデザインメッセ、美術館等に出版、発表している。
1984 工学院大学建築学科修士課程修了
84-90 黒川紀章建築都市設計事務所
85-86 フランス新都市開発公社EPA marne
92-93 文化庁芸術家インターン
95-99 早稲田大学建築学専攻博士課程
99- 東北芸術工科大学生産デザイン学科助教
02 Designers block 2002 London.100% DESIGN, London.
03 DESIGN MUSEUM, London/JCFF2003, New York City.
04 Salone Satellite, Fiera Milano,the Israel Museum, Jerusalem.

りましたが、結果的には実験的なことも積極的に取り組んでいいということでした。グラフィックは上條先生にお引き受けいただき、私達の抱く漠然としたイメージをまとめて下さったので、外に対するアピールをしっかりとおこなうことができました。

鈴 アート関係のメディアだけではなく、建築やインテリアの雑誌等にもこの展覧会が掲載されたということは、ジャンルを超えてアピールできたということです。

紀要が生み出す新たな創造

松 それはかなりインパクトありましたね。加藤先生はお話聞いていてどうでしょう？

加藤到(以下：加) 今の話を聞いていて、この企画はいいなと思いました。経過を確認したいのですが、この企画展は鈴木先生が投げかけたのですか？

鈴 いえ、工芸の企画としてあって、展覧会をする時の会場構成を頼まれたのです。

加 時期的に紀要とはまったく関係なくそのプロジェクトは進んでいたのですか？

原 撮影の段取りを決める折、記録として残すのであれば紀要に載せたなら、という話はしていました。自分たちの研究の成果として残せたらいいのではないかなということで…。

加 今の話をうまく行った成功例として聞いていたのですが、紀

要の役目や可能性としては意外に紀要の側から積極的に仕掛けていくという可能性があるのじゃないかなと…。

松 まったく同感です。紀要が、デザインと美術を融合できるような、またコラボレートできるような企画を提案して、展覧会とタイアップしてやるのも可能かと思えます。

鈴 最初は会場構成を頼まれて、工芸の先生は作品を置く場所を作ってくれると思ったんですね。でも話を聞いてみると空間的なものをやりたいというので、であれば一軒の家をつくりましょうという流れでこのような形になっていきました。それで、それぞれのグループと打ち合わせをして意見を聞きました。また、お互いの境界の関係もうまくまとめていかないといけないという側面もありました。そういう部分ではある程度仲介役に関わった部分もありました。

松 紀要が印刷媒体として毎年残っていくのは記録としては大切ですが、それを作ることに付随して何か新たな創造的な発想が生まれるという、それを意識した編集方針や紀要の作り方という可能性があると思います。展覧会でもプロジェクトでもどちらが主体か一見分からなくなるかもしれませんが、その記録をそこに残して、メインや特集ページとして意識的にやっていくのは面白いのではないのでしょうか。

鈴 たとえば去年、仙台のメディアテーク1階の大空間で、「クリエーターズインスタレーション2004」をディレクションしましたが、そこでは、映像作品を映すのではなく、置く場所を作ったのです。

『山形』という環境。ここから始まる可能性

結果的にはそこには映像だけではない、インスタレーションとしての場所が生まれたので、もう無理矢理ぶつけてしまえば何かが生まれるというのは経験していました。

原 加藤先生は映像が専門でいろいろなメディアに関わっていらっしゃるんですが、紀要をペーパーレスにするなど、印刷媒体以外の形態をどのように考えられていますか？

加 それはいくらかでも可能性はあるし、やれば簡単だと思うのですが、あまり魅力ないかなとも思っていて(笑)、形はペーパーレスであれ何であれいいと思いますが、単に編集

や記録の側に回って、何かネタをくださいではなく、今の話のように実際に現実に何かを起こし、何かをやり遂げて、それをメインに記録しようというほうが発展的ですね。

松 今までの紀要は各先生方が自分の研究発表の場としてしか使っていないような存在でした。僕らの実力を社会にお見せる場はあるのだろうけど、そこから紀要が大きな力を生み出すということはなかったのですが、今後そこから何かを発展させる、クリエイトできるという期待感みたいなものを伺い知れたような気がしますね。

加 紀要の特集ページになるようなプロジェクト研究でしょうか。それをむしろ紀要委員会の方が仕掛けていくという編集方針はすごくいいですね。

松 学内のファンドから資金提供していただくとか、そのプロジェクトに予算をつけてもらうことも考えられます。紀要委員会から提案するスタイルもあり得ますし。

加 教員から紀要に対して逆に売り込みがあってもいいですね。

松 今回は工芸コースと鈴木先生そして上條先生のコラボレーション・プロジェクトでしたが、今後またここに波及していくような予感がしますね。

原 そうですね、今まで論文主体だったものが、今回の写真のように、制作を中心にしていらっしゃる先生方も、論文形式ではない研究成果の見せ方など様々な形でぜひ発表して頂けたらと思います。

生産デザイン学科／今後の展開

松 来年度へつなげていく話をしていきたいのですが、まず生産デザイン学科や制作系学科の先生の中で、今何か興味深い試みをしていることはありませんか？また来年の紀要に使えるということなど、何かあれば教えてください。生産デザイン学科の中でそういう話をする機会はありますか。

鈴 やはり優秀な学生を獲得する意味でも教員の仕事を外部にアピールする必要を感じます。

原 学生募集においては、それぞれのコースの特徴を際立たせなくてはいいませんが、反対に時代の流れはボーダレス化が進んで

いるというジレンマもあります。

松 個々の先生のある一定の空間で並べ、生産デザインってこんな感じですよという訴えかけもありますが、また別の提案もあるのではないのでしょうか。

鈴 大学としてはなかなか先生方の作品を見せる機会もありません。作家として外部でやるしかないようです。

松 美術館や、画廊で発表するというのはありますよね。そこではアートとしては広がりがあると思うのですが、生産デザインの先生の仕事を見ると、かなり範囲が広く、これが生産デザインという枠で括られているのか、と思うのです。若い人、学生や受験生も、さらにわからない部分があると思います。

鈴 そうですね、とにかくわかりづらいというイメージがあるようです。やっぱりグラフィックってわかりやすい。みんな絵を描きたい、絵が好きなのがアート系に来る、それがなかなか立体に結びつかないというところがあります。生産デザイン学科ですが、まず生産という言葉自体のわかりにくさがあります。プロダクトデザインの中には、大きな柱として製品デザインと家具・インテリアデザイン、そして実験デザインがあるということを明確にさせていくということです。今までは何でもデザインしますと言ってたことを、定義としてはっきりさせていこうと考えています。あと一つはそれを外にきちんとアピールしていこうということ。去年、仙台メディアテークで「モノごころ2004」として学生の優秀作品を展示しました。これがすごく評判が良かった。具体的に、作品を見れば一目瞭然でプロダクトデザインというところが何をしているのか、わかっていただけだと思います。

松 先生方の作品もありましたか？学生だけですか？

鈴 学生だけです。

松 それを例えば先生方の作品と置き換えた時に、イメージとしてはどんなことが考えられますか？

鈴 例えば僕は、2002年には、「ロンドンデザ

イナーズブロック2002」。翌年には、「ニューヨークコンテンポラリーファニチュアフェア2003」。そして去年から、「ミラノサローネ2004」という国際家具見本市に出展し、今年も参加します。やはり、国際的な舞台でアピールしていきたいという願望はあります。ロンドンのデザイナーズブロックのような国内イベントとしては、「東京デザイナーズウィーク」、「東京デザイナーズブロック」があります。それはデザインのお祭りで、青山・渋谷・六本木辺りのインテリア雑貨ショップが参加して一週間盛大に行われるのですが、その中の学生展にここ3年ほど生産デザイン学科として参加しています。そこで本学学生が全国の学生の中でグランプリを受賞するなど大変活躍しています。日本の中心から離れたところで、東京よりもストックホルムを見ているような、東京をすっ飛ばしてインターネットで世界につながっている、そういう場所から生まれるスケールの大きい、東京とは違った感覚の作品が評価されてきて



いると最近感じています。

松 これも学生対象なのですね。このことは紀要には載せていますか？

鈴 その仕事は紀要にはありませんが、それはメディアの露出度からいったらすごいですよ。あらゆるインテリア系雑誌がそれを特集していましたし、テレビにも中継されました。プロジェクトとしては面白いですね。もし載せるとすれば、その作品製作過程にドラマがありますし、編集と言う視点から見れば十分に面白いテーマになると思います。

原 鈴木先生の「モバイル」での作品のように、様々な場所に空間を持っていくことで多様な人が関わるといのは紀要のテーマとして可能でしょうか？

鈴 そうですね、こちらからコンセプトを具体的に提示していくことが大切ですね。例えば誰と誰を組み合わせるとか、こういうジャンルで、こういう条件でとか。昨年まで、環境デザイン学科の松本先生たちと一緒にやっていた「モバイル・アーキテクチャー展」は、今年度からは「小屋作りワークショップ」という名前に変えて、環境デザイン学科と生産デザイン学科の共同のワークショップ形式の集中講義にパワーアップしていきます。他大学からも参加を募り、もっと大きな規模で山形から何かを発信していきたいと考えています。

松 こちらから何かを投げかけて、先生方の中で考えていただくのとまた新しいアイデアが出てくるのかなと思いますね。

鈴 もし紀要が編集的な要素を持つのであればまさに巻頭企画ですから、予算を持って企画できればいいのではないのでしょうか。

松 そういう案をこちらから大学へ提案して横断的に各学科をフィーチャーするような企画を取り上げることが、ゆくゆくは学生募集につながるようになるかもしれないし、先生方も一定の空間で、ひとつにまとまってモノ作りをしていければ面白い試みとなると思います。自分たちの足下を見つめ直すという作業がいま必要だと思えますね。私はまったくモノ作りとは関係ない美術史・文化財保存修復学科の所属です。先生方はそれぞれが専門分野で論文書いていますので、ある意味ではまったくまとまりがつかないのですよ。各教員がバラバラにカリキュラムつくって求心力をなくしていく…それでいいかということではなくて、どこかできちんと共通項を持っていたい。それがゆくゆくは教育に反映されるのではないかと思います。教員の専門分野ではなかなかまとまらないので、例えば一挙に学生と一緒にお寺に仏像を見に行きます。美術的な、宗教的な、材料的な様々な観点から見ながら、学生の前で本音トークしてもらおう。こんな試みで、今まであったボーダー的な部分を解消出来るのではないかと…。教員が全員集まってやるってことはなかなか難しいのですけど。部分的にでもお互いの立場や専門分野での考え方を知るといいうチャンスを設けると、少しずつわかり合えていくような気がします。それがこういう仕掛けで出来るのはもっと緊張感があってもいいかなと思います。

情報デザイン・映像／ 山形から世界へ繋がる

松 次は情報デザイン学科に移りたいのですが、加藤先生、何か面白い企画やドキュメンタリーなどあると思いますが。

加 新しいニュースでは、日本で一番歴史があるとも言える『東

京ビデオフェスティバル』で、2年前に卒業した女子学生がグランプリを受賞しました。これは全国紙にも載るほど大きなニュースでした。彼女は在学中、ボランティアとして山形ドキュメンタリー映画祭に関わり、卒業後一昨年の映画祭の学生作品を集めた特集プログラムで始めて自作が上映され、この時に国際映画祭にゲストとして招待されることに味をしめてしまったんです。その後、バンクーバーやロッテルダムの映画祭に作品が招待された時にも、交通費は自分で借金して参加していましたが、帰国後に東京ビデオフェスティバルのグランプリが決まっていたので、賞金で借金を返すことが出来たというわけです。すべて、結果オーライって感じて、今年のにのっているんですよ。実際山形の映画祭がな

ければ、国際映画祭で自分の作品が上映されるなんてすごい距離があって、考えもつかないことだったとは思いますが、身近にあって、ボランティアで参加していた映画祭から、あれあれという間に世界につながっていった、その辺の感覚が、映像を学んでいる学生にとっては、山形ってすごく恵まれている環境だなと。ところがそれは、現役の学生はなかなか気づかないのですね。逆に東京や関西の学生がわざわざ旅費を掛けてやって来るのですが、ここにいる学生はそれほどのもんだとは認識がなくて、ちょうど同じ時期に学園祭が重なったりするものだから、映画祭当日に古着屋やっていたりするわけですよ。そうすると東京から来た学生なんかはびっくりするわけね。その山形で映像学んでいるのに、古着売っている！なんてね。(笑) しかし一方では、そこで足がかりを見つけるとぼんぼんと世界に通じていっちゃうこともあって。積極的に学生たちにそういう場を使ってほしいと思いますし、山形映画祭も、映画祭にかかわっていた本学の卒業生が活躍しているということをととても歓迎してくれています。私自身も昨年、前回の山形映画祭で上映された自作を北京で上映しませんかということで、行ってきましたが、そこには世界中から優秀な留学生が集まって来ていて、上映後の質疑応答なんか、とてもハイレベルなんですよ。北京はもはや東京なんかよりもはるかに国際的な都市なんですね。そこで一度上映されると、更に世界各地へと、どんどんつながっていくことを実感しました。

鈴 映像だからでしょうね。場所も問いませんよね。例えば、上映される場所が地方の、いわば中心ではないところで発表されても、それが世界中に同じ空気で配信できますしね。



ボーダーを越えて、なお求めるもの—エネルギーの融合

加 それがすぐそばの山形・七日町から、世界につながっていく場があるというのはすごいことですよ。

松 ということを見ると、うちの学生はたいへん恵まれた環境があるわけですね。たとえば、映画祭の中の学生部門を大学がマネージするという可能性も考えられます。全国的に見ても、地方自治体がやっている芸術祭としてはもっとも成功している例で、様々な場での認知度も高くなってきていますし。

加 私もヨーロッパで初めて会った人に、山形と言えば映画祭の町と言われるほどでした。

鈴 映画祭ということで、日本にも世界にも何力所かありますが、東京を飛び越えて、カンヌや山形のような地方都市で、そういう関係でありえるのがいいですね。芸工大もそういう位置感覚を持たりたい。山形—東京—ストックホルムというような。もっと実態としてあれば面白いと思います。

松 なにか大学の役割としてつなぐ事ができないかとも考えてしまうのですが…。学内のものとして映画祭についてまとめられているものはあるでしょうね。その辺もプロジェクトとして紀要に載せていけるのではないかと…。いろいろ伺うと、たいへん面白い話が出てきます。いかに今までお互いの領域を知らなかったかということも感じます。ボーダーレス化もさらに激しくなりますから、もっと活動としてオーバーラップ出来る部分もたくさん出てくると思います。新たな発想も出てきますし横のつながりとしての可能性もあるじゃないかなと。最後に今後の紀要への希望はありますか？

原 高校生の立体作品に対する興味が薄れていると痛感しています。紀要からその辺りを掘り起こしていければと思っています。自らの手を使ってモノを作らなくなった人達に対して立体造形の魅力を伝えることができないでしょうか。

松 事実、高校では絵画を描く先生しかなくて、もはや立体を作る先生が教育の現場にはいないという話をきいて愕然としました。それ以上に驚いたのが、美術の時間がゆとり教育などで縮小されてきているという現実です。このことが、ゆくゆくは美術・芸術を学ぶ学生の減少に直結するのではと。やはり、面白さ、楽しさという部分でもっとアピールしていくのは大事なことだと思います。

加 要は幼い子どもが積み木遊びをしなくなったということです。モノではなく、入りやすいグラフィックやバーチャルな世界ということですよ。

鈴 入り口として絵が好きながきているので、そこから先どうつなげていくのかということですよ。

松 教職を目標として学びたいという学生を大切に世に送り出すことも大事なことです。平面系は通りやすいという現実もあるようですが、立体への関心を呼び戻す方法として、紀要が何かを仕掛けていければということですね。見せられるものは、どんどん見せていくということも必要ですね。

鈴 インターネットを活用して紀要や学内の雑誌などとの連携を取って、うまくリンクさせていけたらいいですね。

松 今日はお忙しいところ、今後の紀要の姿を予感させる貴重な話をいただき、ありがとうございました。

